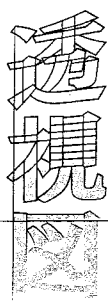


橋の老朽化

点検・補修 中小の技生かせ



経済部 大宮司聡



道路や鉄道にかかる「橋」は生活に欠かせない。1996年の東京五輪や70年の大阪万博のころに建設されたものも多く、老朽化が進む。これから増えるのが、点検や補修

などの保守作業だ。そこに目を付けた関西の中小企業と大企業などが連携し、作業を効率化する機器を開発している。

取り組んでいるのは「東大阪橋梁維持管理研究会」。ボルトや機械といった中小メーカー約20社と、関西大や近畿大、南海電鉄の子会社などが

参加し、2014年1月に発足した。保守作業は高い場所に登ったり、橋の下に潜り込んだりして、傷みやキズなどを確認。危険な部分は、補修していく。人手と時間がかか

るのが課題だ。「小回りの利く中小企業なら、問題を解決するための道具やサービスが生み出せるのではないか」

(坂野昌弘会長・関西大教授)と検討を始めた。

これまでに二つの試作ができた。一つは、繰り返し力がかかることよって生じる「疲労亀裂」などの補強に使う「ワンサイドボルト」。ナットを使わずに、補強用の鋼板を橋の下側から取りつけることができる。道路を通行止めにしなくても工事が可能

だ。もう一つは「多機能掃除機」。吸い口を工夫し、ゴミや砂などを手軽に取りのぞいて作業をしやすくする。

中小企業は個性が強く、ほかの企業や組織との連携は簡単でない。研究会で経営者と教授らが、同じ目線で真剣に意見を交わす姿が印象的だった。「中小企業が活躍できる場をつくる」という共通の思いがあるという。大手の下請けの仕事が減り、各企業が自ら道を切り開かなければいけない時代。1社だけの力には限りがあっても、異なる分野や業種と協業すれば新たなビジネスが実を結ぶ。そんな先例になるよう願っている。

◆「透視図」は、大阪本社経済部の記者が取材で感じたことをつづったコラムです。原則、毎週金曜日に掲載します。